氏　　名	西谷大
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大乙第 180 号
学位授与の日付	平成２０年３月１９日
学位授与の要件	学位規則第６条第２項該当
学 位 論 文 題 目	多民族の住む谷間の民族誌 －生業と市からみた環境利用と市場メカニズムの生起－
論 文 審 査 委 員	主　査　教授　篠原　徹 准教授　安室　知 教授　西本　豊弘 教授　市川　光雄（京都大学） 理事長　大塚　柳太郎（国立環境研究所）

論文内容の要旨

人が生態的な環境を利用するなかで、市場メカニズムがどのような過程をへて生起するのかを明らかにしてみようとするのが本論文の主要な目的である。事例としてとりあげるのは、中国雲南省の南でヴェトナムと国境を接する金平県の者米谷という場所である。

者米谷は地政学的には中国という巨大な国家の辺境に位置する。そして山と谷がおりなす複雑な地形であり、8つの少数民族と1つの集団が暮らす多民族地帯である。それぞれの民族は言葉や習慣が異なるだけでなく、利用する土地の生態的な環境と生業戦略が異なっている。

者米谷の生態的な環境は複雑であるが、各民族・村はこの多様な生態的な環境を、それぞれが網羅的、均質的に利用しているのではなく、ある特定の生態的な環境を、部分的に選択して利用している。そのため同質で差異のない生業戦略が並列的、均一的に展開しているのではなく、むしろ反対に各民族・村ごとに生業戦略に独自性と差異性が存在する。つまり者米谷では、生態的な環境の差異性を生業戦略の差異性に転化することで、多様な生業戦略が集合し相互に補完しあう「生業複合体」を形成している。

生業複合体は市システムによって支えられ、相互に影響しあうことで促進されてきた。生業複合体と市システムは、各民族・村単位で生態的な環境に応じた生業戦略の創出と分業を特徴とする。それは結果として、多民族が比較的限定された地域で生活する上で、多様な種類の生産物を算出するとともに、相互に生産物を依存することになり、そのことが収穫の危険を分散するリスク回避の役目も果たしてきた側面もあると考えられる。

このことは生業複合体と市システムが、各民族・村ごとに生業システムそのものも相互に補完していたことを意味している。つまり者米谷が地域として「生産物の相互依存」と「生業システムの相互補完」という生業戦略を創出したことが、比較的限定された地域で、多民族の共存を可能にした1つの要因になってきたといえるだろう。

そして市システム＝市場メカニズムは、生態的な環境のある特定的な部分を、ある特定の民族・村が選択的に利用する、または占有することで差異的に利用した場合に生起しやすい。そして生業複合体・市システム・市場メカニズムは、ある段階まではけっして社会から突出したものではなく、地域の住民が主体的に利用でき、地域の固有の生活維持システムを安定させる方向に働く。ところがある段階をすぎ条件が整うと、地域の生業の変容を急激に推し進め突出した利潤を追い求める方向へと突き進む。

生業の差異性と交換が市システム生み出す過程は決して意識的におこなわれたのではないが、者米谷の生態的な環境の差異性を各民族が利用するそのはじまりが、または特定的な生態的な環境の選択と占有が、市場メカニズムというシステムを宿しており、したがって不平等あるいは階層分化は、生態的な環境の差異性とともにあったといえる。者米谷にみいだされた市場メカニズムは、外在的な影響によって生起したのではなく、人びとがこの谷に住み利用しはじめたその時点で、その生起の要因がすでに生態的な環境の差異性のなかに埋め込まれていたといえる。いいかえれば者米谷の複合生業体をささえてきた市場メカニズムとは、環境利用と別個に発生したシステムではなく、生計維持システムをささえるための、大きなエスノ・サイエンスの領分の1つだといえる。

者米谷の場合は比較的狭い地域内で、河谷平野から山の斜面へという複雑な生態的な環境が存在し、各民族・村単位でそれぞれに異なった環境利用をおこなっている。つまり生態的な環境が非常に多様で、差異性を利用した市場メカニズムの生起と顕在化がおこりやすいという条件にある。しかしこうしたある地域内で生態的な環境の差異性を利用

する状況は、何も者米谷だけの特殊な世界ではない。おそらく人類の歴史上、世界のあらゆる場所で繰り返し生起してきたのではないかと考えられる。

けっきょくのところ、人は自然との関わりのなかで生きてきた。生業、交換、市、そして利潤を生み出す市場メカニズムといった人が作りあげてきたシステムも、人と自然との関係性なかでしか決定されないのだという思考が必要であろう。

地域の生活世界を理解するには、ポランニーが主張した市場経済が歴史上極めて特殊な制度として社会から自立する経済に対して社会に埋め込まれた経済や、または都市と農村、国家の中心と辺境、現代のグローバル化しつつある社会と地域の共同体的社会といった、人びとの生活世界を二項対立的な構図で考えるのではない見方が必要であろう。

人間の生活世界は、生態的な環境だけが人間の行動を制約しているわけでもないし、また人間が常に自然界において中心的な存在だったこともない。環境利用、生業、そして、市場メカニズムは、1 つのものが独立して存在しているのではなく、さらにこれらとりまく多様な要素のなかで、相互の関係性と絡み合いながらそれぞれが決定されている。生活世界を形成しているさまざまな要素の相互の関係性を理解することが、人間の社会や人間とは何かという根本的な問題を理解することにつながるのだろう。

論文の審査結果の要旨

西谷大氏の学位請求論文は、中国雲南省紅河ハニ族イ族自治州金平県の者米郷に共存する９つのいわゆる中国の少数民族（ここでは漢族も居住しているが圧倒的に少ない）のなかでタイ族、アールー族、ヤオ族、ハニ族（ひとつの谷のなかの９つの集団が相互にどのように他称として他のエスニック・グループを呼んでいるか、あるいは自分たちを自称としてどのように表現しているかは異なる場合がある。また、この地域のなかの行政的な立場の人によっても異なる場合がある。ここでの表現は生活者としての自称である）の４集団を対象に、彼らの生業の詳細な調査とその生業の差異を結びつける市場との関係をダイナミックに描き出した第一級のモノグラフである。そしてそれは単に第一級のモノグラフにとどまらず、きわめてミクロな視点から市場がどのように発生し、どのように歴史的に展開するのかという点について大胆な仮説を提供していて、そのことに関してもユニークなモノグラフであるといえる。

とくに生業について焦点をあてているのは生業の場であり、４つの少数民族の一見同じようにみえる棚田とその灌漑方法の差異を抽出し、生態学的環境の差異をどのように生業戦略の差異へ転換させていくのかを見事に叙述している。それは棚田と灌漑方法ばかりではなく、稲作以外の生業のありようを生態学的な環境の差異から説明し、常畑（かつての焼畑も含め）や水田漁撈、野生植物利用、アグロ・フォリストリーなどを、彼らの生活環境の土地利用についてGISを使った詳細なデータをもとに描き出している。

このような方法は従来の生態人類学的な調査ではしばしば行われてきた。　しかし同時に４つの少数民族を対象にすることなど複数の少数民族間の差異を明らかに研究はほとんどなかった。　小さな谷において高度による「棲みわけ」ともいえる４つの少数民族の共存を可能にするのは、生態学的環境利用の差異を生業的差異に転換することであるが、実はそれだけではないことを西谷氏は明らかにしている。

この小さな谷のもっとも低い河岸段丘上のタイ族の住む地域で行われる市場が重要な役割を果たしていることをこの論文は明らかにしている。従来、人類学的な調査では多くの調査者が、当該調査地域で開かれる市場には多大な関心を寄せてきた。しかし、市場の調査は規模や人の出入りの多さや商業の複雑性などによって一人の調査者が対象にすることは困難であった。古くは有名なマリノフスキーのメキシコの市場の研究などもあるが、限界があった。また中国における市場に関するスキナーを初めとする人文地理学的な研究も多いが、それはほとんど行政的な機関のつくった統計的な資料に基づくもので、市場に関わる人びとの行動や商品の動きを直接観察的な手法で明らかにしたものはほとんどなかった。

西谷論文は直線的な谷のなかである一定の距離をおいて定期的に開かれる市場を商人と農民の双方がどのように関わるのかを明らかにし、農民の生産する農産物と谷の外部から持ち込まれる工業的商品がどのように貨幣を媒介して交換されるかを描き出している。そして、農民の側には少数民族による農産物生産の差別化が、この市場によって生業の差別化をより拡大化させる方向に働く傾向性を発見している。この機能こそ９つの少数民族の共存を可能にしているわけで、西谷氏は谷全体が生業複合体であることを主張している。市場メカニズムのもつ多機能性を生態人類学的手法で明らかにし、それを岩井克人の経済学研究からの啓示を受けて、農民と市と商人の世界における資本主義の生態学的意味を抽出している。

４つの少数民族の生業活動を同じ手法で分析し、それらの差異が市場とどのような関係にあるかを詳細に明らかにした本論文は、生態人類学の明らかにしてきた生業経済の世界

と経済学が明らかにしてきた市場経済の世界がどのように衝突し干渉しているのかといったことにも大きな示唆を与えるものである。

西谷氏は、中国雲南省紅河ハニ族イ族自治州金平県の者米郷に住む多民族の共存の仕組みを資源としての環境を利用する生業と市場メカニズムから明らかにした。きわめて詳細な多民族の共存のモノグラフを描きだしたが、こうした世界が一般的にどのような意味をもつのか結論のところで他の研究と詳細な比較を試みている。それはアンデス高地に住む人びとの多民族の相互依存と相互補完の生業戦略との比較をまず試みている。また、アフリカ農業の集約化と内部化という生業の２つの傾向性との比較を試み、者米郷の生業戦略の位置づけをおこなっている。最後に、市場が発生しにくい社会として同じ中国の海南島リー族社会の生業との比較を試みている。それらの比較のうえで、者米郷の生活世界とは、結局「市場メカニズム」さえ同じ谷に住む人びとのエスノ・サイエンスの一部とみなす社会であると結論づけている。

西谷大氏が、アンデス高地民、ベンバ、トングェなどのアフリカの焼畑農耕民および中国海南島リー族社会など生態人類学的調査が精緻に行われた地域との比較において、それらの生業戦略に関する議論は彼が主張する「人が生態的環境の差異を生業の差異に転化し、生業の差異から生産物の差異を生み出し、市を介することで交換し、そこから利潤を生み出す市場メカニズム」という基本的なダイナミズムにそれほど矛盾しないと結論づけている。それらは各民族あるいは各村における「生産物の相互依存」と「生業システムの相互補完」のありかたの相異として現象しているにすぎず、市場経済と生業経済、都市と農村、国家と周辺、グローバル化する社会と共同体的社会、農業の集約化と非集約化といった二項対立的な構図では生活世界は解明できないことを主張している。これは一見二項対立的にみえるものでも「単に差異性から利潤を生み出すシステムにしかすぎない」とする岩井克人の資本主義理論と重なり合うところが多く、この理論に対して生態人類学からひとつの実証的な根拠を提供している。もちろん、結論で述べる市場メカニズムの生起という問題は、経済学の主要な問題であり、それほど容易に解ける問題ではないであろう。しかし、この主張は生態人類学から経済人類学への大きな寄与であることはまちがいない。　西谷大氏の生態資本主義という段階の設定に関する仮説は議論を呼ぶところであるが、それまでの多民族が共存するありかたを各民族の生業戦略と市場メカニズムの関係から詳細に描いたところは今までない第一級の新たなモノグラフとして大きな価値をもっており、学位請求論文として十分にそれに相当するものと判断される。